九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

「情緒的甘え」と「道具的甘え」との区別の実証的意義の検討 ： 青年期の甘え欲求の違いと甘えタイプからの分析を通して

小林, 美緒
九州大学大学院人間環境学府

加藤, 和生
九州大学大学院人間環境学研究院

https://doi.org/10.15017/10270

出版情報：九州大学心理学研究. 8, pp.41-52, 2007-03-31. 九州大学大学院人間環境学研究院
バージョン：
権利関係：

Kyushu University Psychological Research
2007, Vol.8, 41-52

「情緒的甘え」と「道具的甘え」との区別の実証的意義の検討

―青年期の甘え欲求の違いと甘えタイプからの分析を通して―

小林　美緒[1)]　九州大学大学院人間環境学府
加藤　和生　九州大学大学院人間環境学研究院

Examining empirical significance of the distinction between emotional and instrumental *amae*
―Analyses of differences in adolescent needs for *amae* and from the view of *Amae*-engager Types―

Mio Kobayashi (*Graduate School of Human-Environment Studies, Kyushu University*)
Kazuo Kato (*Faculty of Human-Environment Studies, Kyushu University*)

This research was the first study that ever attempted to examine empirical significance of Kato (1998)'s theoretical distinction between emotional and instrumental *amae* based upon the purpose of *amae*. We examined the following questions with "Need for *Amae*" Scale we developed: (1) How strongly one has needs for emotional and instrumental *amae* toward 5 *amae* objects (or persons) in different *amae* situations, (2) how differently 4 types of *amae*-engager, as detected by "*Amae*-engager" Type Scale (Kato & Kobayashi, 2000), express those two needs for *amae*. 301 college students responded to a questionnaire. Analyses revealed the following: (1) the present findings were inconsistent with those of Fujiwara et al. (1981) in that college students have relatively higher needs for emotional *amae* toward mother, and (2) Type B (or the type of failing in and/or rejecting of engaging in *amae*) report their lowest needs for emotional *amae* toward father and mother, compared with other types. Based upon those findings, introducing the proposed distinction between emotional and instrumental *amae* would provide an important and useful view for elucidating the aspects and/or phenomena that were very likely overlooked in the previous *amae* studies, as well as investigating individual differences on *amae*.

Keywords: emotional *amae*, instrumental *amae*, needs for *amae*, *amae*-engager types, adolescence

(1) はじめに

土居 (1971) によって日本人に特有なものである「甘え」[2)]の存在が指摘されて以来,「甘え」は, 日本人の心性を理解する上での鍵概念とされてきた。しかし, 土居が当初行った「甘え」という定義は, 後に彼自身も「大層抽象的で持って廻った言い方をした」と述べているように (土居, 1988),「甘えの心理は, 人間存在に本来つきものの分離の事実を否定し, 分離の痛みを止揚すること」という具体的な実態が非常に捉えにくいものであった。そして, 土居の指摘以後,「甘え」研究は「そもそも『甘え』とはどのようなものとするべきか」ということについての理論的レベルでの議論を主にして展開されることとなった (竹友, 1988 ; Kumagai & Kumagai, 1986 ; 木村, 1972 ; Kato, 1995/2005など)。そのため,「甘え」の概念が30年以上前に指摘されたものであるにも関わらず, 実証的レベルでの研究はごくわずかしかなされてきていない。だが, どのような種類の「甘え」があるのか, 人は日常生活の中でどのようなときに誰に対して甘えたいと思うのか, 甘えの気持ちの程度には何らかの要因による個人差があるのかどうか, といった点について, 実証的なデータに基づく研究が行われる必要がある (e.g., Kato, 1995/2005)。

[1)]本論文は, 日本心理学会第69会大会 (2005年, 大会発表論文集, 188) で発表したデータについて再分析を行ったものである。質問紙の作成及びデータ収集・整理に協力してくれた学部生の岡崎舞氏と西島智絵氏, また調査に協力していただいた回答者に心より感謝いたします。
本論分に関する問い合わせは以下まで : kobamio@fka.att.ne.jp
[2)]本研究では,「甘え」の特定の側面 (例えば, 甘え欲求, 甘え交流など) を指して「甘え」という言葉を使っていない場合には, 意図的に「甘え」と表記することにする。その理由は, Kato (1995/2005) が指摘しているように, 従来の論述や研究論文では,「甘え」と言う言葉を使いながら, Kato がそのモデルで示した「甘え」に関連する諸側面・現象のどの部分を指しているのかが明らかにされないままに議論し, その結果, 不毛な議論を引き起こしてきた経緯があるからである。なお, 本研究でのこうした試みが,「甘え」現象をより厳密に区分して捉え, 記述していく動きを研究者の中に作る一助となることを望む。

（2）2つの甘えの種類：情緒的甘えと道具的甘え

数少ない実証的研究の中で，加藤（1998a）は，大学生および成人（25才から55才）の「甘え」に関する素朴概念の質的分析を通して（Kato, 1995/2005），大まかに「甘え」には2種類のものが区別できると主張した。すなわち，「目的的甘え」と「道具的（あるいは依存的）甘え」である。目的的甘え行動とは，「甘え行動を通して，甘え関係を維持したり，相手の自分への愛情に気づいたり，愛されることを楽しむといったことのために甘えること自体を目的とするあるいは関係自体を目的とする甘え行動」である。それに対して，道具的（あるいは依存的）甘え行動とは，「甘え行動を通して相手を利用し，自分個人の欲求を満たすためだけに行う（関係のためではない）甘え行動」を言う。

Kato（1995/2005）は，それらの具体例として次のものをそれぞれ挙げている。すなわち，「目的的甘え」は，

> 「仕事で疲れた様子の妻が，夫の名前を呼び，近くにやってくると夫を背後から抱きしめた。そして夫の肩に自分の頬を預けたまま，しばらくの間，妻は夫に抱きついていた。夫にはそうすることで妻がリラックスし，幸せを感じているように見えた。夫も妻が元気になることを望んでいた（p.75。訳は著者ら）」

などを挙げている。この「甘え」は，表面的には，相手にやって欲しいことを言葉で明確に説明することもなく，ただ一方的に他者との身体的な接触を求めているように見える。しかし，甘える側には，これまでの相手との関係から，「何も言わなくともこの人なら今の自分の気持ちをきっと分かってくれるだろう。今ならこのように振る舞っても許されるだろう」という相手へ暗に期待する気持ちがあると推測される。そして，甘えさせる側も，相手の振る舞い方やその場の雰囲気から相手が自分に期待していることを敏感に読み取り，その上で相手の甘え行動を積極的に受容しているようである。したがって，大人でありながらまるで子どものように相手にべたべたするこの甘え行動の背後には，相手に構ってもらうことで相手が自分に向けている愛情を確認したり，ちょっとしたやりとりをお互いに楽しんだりしたい気持ちがあると考えられる。であるとするならば，この「目的的甘え」が満足されるのは，甘える側が「相手がちゃんと自分の甘えに応えてくれた」と実感できたときだといえよう。つまり，相手が自分の話を聞いたりすることで，「自分のことをちゃんと相手は分かってくれている」と思えることがこの「目的的甘え」では重要になる。ゆえに，ここで大切なのは，相手との情緒的な交流によって親密感を味わったりリラックスできたりすることであり，相手にしてもらいたい内容や具体的に解決してもらいたいことではない。

これに対して，「道具的（あるいは依存的）甘え」の例では，「自動車免許を取るためのお金を両親に貸して欲しいと頼む（p.71。訳は著者ら）」などといったことが挙げられている。このような「甘え」では，「甘え」が達成されるのは，実際に相手がお金を与えてくれたときだといえる。この場合には，いくら相手が自分の金銭的に困窮している状況を理解し，慰めの言葉をかけてくれたとしても，具体的にお金を貸してくれるという解決策を取ってくれないときには，「甘え」は達成されないことになる。話を聞いて状況を理解してくれただけでは，心の中で不満の残る結果となるのである。

さらに，加藤（1998a）は，上述の「甘え」の素朴概念の分析から，この2つの「甘え」について次のような特徴をあげている。「第1に，『目的的甘え』は，年齢があがるにつれて，その存在，意義，良さといったことをより理解するようになる傾向があるようである。第2に，大学生までは，少なくとも意識レベルでは，『道具的甘え』が甘え行動の中心であり，実際の行動でも道具的甘え行動がより多いのではないかと推察される。今後，こうした違いを，更に質的にも量的にもより詳細に検討していく必要があるであろう」と述べている。

そこで，本研究では，このような甘え行動の目的の違いについて実証的に検討を行う。なお，本研究は，Kato（1995/2005）の「目的的甘え」と「道具的甘え」の考え方にもとづくものであるが，「目的的甘え」の要素の中でも「甘え行動を通して情緒的にじゃれあったり構ってもらったりすることを楽しむこと」を中心的な要素と考え，これを「情緒的甘え」と呼ぶことにした。具体的には，「情緒的甘え」とは，「他者との情緒的なやりとりを行うことを目的とする『甘え』。相手が自分の甘えたい気持ちを読み取ってくれた時点で当初の甘え欲求が満たされるもの」と考える[3]。一方，「道具的甘え」とは，「甘えることで他者に自己の問題解決のための行動を取ってもらうことを目的とする『甘え』。相手が実際に期待する行動を取ってくれることで当初の甘え欲求が満たされるもの」として概念的に定義した。

本研究では，このような「情緒的甘え」と「道具的甘え」が重要な特徴を示しはじめる時期として，特に18歳以降の青年期に注目した。というのは，青年期は，社会の中で独り立ちした成人となるための準備段階であり，

[3]「情緒的甘え」は「目的的甘え」の一側面を取り出したものであり，両者は完全に同一の現象を指すものではない。本研究では「情緒的甘え」と「道具的甘え」とを対比しながら検討を行ったが，「目的的甘え」の他の側面と「道具的甘え」とを対比した場合にも本研究と同様の結果が得られるかについて，更なる検討が求められる。

この時期の青年は子どもから大人に向かう移行期だとされている（e.g., Erikson, 1959）。であるとするならば，この時期にある者（例えば大学生）は，それまでの主要な甘え対象である親に対して，自分のために何かしてもらったり，援助などをあてにしたりする「道具的な甘え」を行うことは，年齢にふさわしくない「子どもじみた行為」としてより回避されはじめるかもしれない。実際に，大学生の甘え対象と「甘えの表出」との関連を初めて検討した藤原らの結果でも，大学生は，親よりも親友や恋人に甘えの気持ちをより強く表出していることを明らかにしている（藤原・黒川，1981）。

では，「情緒的甘え」でも，「道具的甘え」において仮定したように，青年期になると親に向けられる表出は同じように低下するのであろうか。土居（1971, 1988）の主張では，「甘え」の基本的原型は乳児期にあり，母子関係と密接に結びついているものである。この時期の，「相手に受け入れられたい」と思い，受け入れられることで満足するという乳児の「甘え」は，まさに「甘え」を通した情緒的な母親との交流である。このような情緒的な「甘え」は，青年期以降においても，原型的な甘えとして日常生活の様々な甘えの根底に存在するのではないだろうか。

それに対して，「道具的甘え」ではどうだろうか。上述した「自分のために何かしてもらうために甘えを利用する」という「道具的甘え」の特徴から考えると，「道具的甘え」とは，「情緒的甘え」を基礎とした上に生じた「甘え」の１つであると見なせよう。であるならば，「情緒的甘え」は原型的なものであるがために，「道具的甘え」よりも「甘えたい」という気持ちをより強く持ったり，抵抗感なく示せたりできるものであるかもしれない。そのために，同じような困ったり葛藤したりしているような状況でも，気持ちの上だけで甘えたいのか（情緒的な甘え），それとも問題解決のために具体的に何かしてもらうことを求めて甘えたいと思うのか（道具的な甘え）では，適切な甘えの対象として思い浮かべる人物が異なってくるのではないか。であるとすると，上述した藤原らの結果では，親友・恋人が大学生での主要な甘え対象とされていたが，「情緒的甘え」においては親がむしろ甘え対象となる可能性がある。

（３）先行研究で開発された「甘え」尺度とその問題点

では，これまでの甘え研究において，「甘え」はどのように捉えられてきたのだろうか。「甘え」を実証的研究の中で数量的に捉えようとする試みは，藤原・黒川（1981）の研究が最初のものである。

彼らは「大学生では親子関係において最も甘えが強く見られるのではないか」という仮説の元に，「実際にどのような状況のときに，誰にもっとも甘えたいと思うのか」を分析した。その際，彼らは，曖昧で捉えにくい「甘え」を実証的検討を可能とするために，「甘え表出」尺度の作成を行った。その際，彼らは，対人関係に関わる多くの動詞を収集し，それについて多次元解析を行った。その分析にもとづき，彼らは「甘えの表出」[4]を最終的に選ばれた計10語の合計得点として操作的に定義した。なお，これら10項目すべてでは，例えば，「あてにしたい」，「後押しをして欲しい」などのような明らかに「甘えたい気持ち」を示す表現が用いられている。したがって，藤原らによる「甘え表出」の言葉は，実際に何らかの行動として表現される前に生じる「甘えたい」気持ち，すなわち甘え欲求を指していると推測される。であるとするならば，藤原らは明言していないが，この「甘え表出」尺度は甘え欲求を測定するものだといえるだろう。

この藤原らによる尺度は，その後の研究者たちによっても利用されるようになり，例えば，出生順位によってどのような違いがあるかといった個人差の視点から検討されている（大迫・高橋，1994）。この藤原らの研究は，曖昧なまま扱われてきた「甘え」の概念を操作的に定義し，日常生活における具体的な状況の中での「甘え」に関するデータを収集し，それを統計的に解析することで初めて実証的な検討を行ったという点で評価できよう。しかし，「甘え」を表す10語の中に，「情緒的甘え」にあたる項目（例：慰められたい，言わなくてもわかって欲しい）と「道具的甘え」にあたる項目（例：まかせたい，相談したい）とが混在しており，この尺度を用いることではわれわれの主張する２つの「甘え」のどちらを表しているのかを弁別できない。

さらに，藤原らはこの「甘え表出」尺度を使い，様々な甘え状況において誰に甘えの気持ちを持つかについても検討を行っている。その結果，予想に反して，大学生は両親よりもむしろ恋人や友人の方に甘えを強く表出することが示された。だが，甘え行動の目的によって「情緒的甘え」と「道具的甘え」とが区別できるとするならば，藤原らの尺度が測定できていないと考えられる「情緒的甘え」においては，藤原らの結果を追試出来ないのではないかと予想される。なぜならば，先述したように，

[4]藤原らは，この尺度によって捉えられるものを「甘えの表出」と呼んでいる。だが，「甘えの表出」が具体的に甘えの何を指すのかについて厳密な定義を行っておらず，「甘えの表出」が「甘え」のどの側面を測定しているのかは明らかではない。すなわち，これが，実際に行動を起こす前の段階での「甘えたい」という欲求の生起を指しているのか，それとも実際に相手に対して甘え行動を起こすことを指しているのか（甘え行動の表出），あるいは実際のやりとりを指しているのかが明らかでない。

Table 1
甘え行動パターンの4つのタイプ

		自己観	
		ポジティブ	ネガティブ
他者観	ポジティブ	**A型：甘え上手タイプ** （適度な甘え・自信・甘えの享受）	**C型：気兼ねする甘え屋タイプ** （過度な気兼ね・拒否不安・他者任せな甘え）
	ネガティブ	**B型：甘え難いタイプ** （甘え欲求の抑圧・甘えの否定）	**D型：混乱型甘え屋タイプ** （極端な甘え：欲求のコントロール不全）

情緒的な甘えが原型的な「甘え」となっているのならば，大学生でも親友や友人と同じくらい，両親へも甘えたいと思っている可能性があると考えられるからだ。

また，近年，この藤原らの「甘え表出」尺度以外にも甘え欲求を測定しようとする尺度の作成が試されている。玉瀬・脇本（2003）は，藤原らの「甘え表出」尺度では，同一の被験者が膨大な項目に回答しなければならないので，実施が困難であり，ゆえにより実用的な「甘え」尺度が必要であるとして，その作成を試みた。玉瀬ら[5]は，藤原らの甘え対象のうち，類似した対象を1つのカテゴリーとしてまとめたり，甘え状況を現代の大学生によりあてはまるものにしたりすることで，甘え対象と甘え状況の数を減らしたより一般的に使用可能な「甘え」下位尺度[6]を構成した。しかし，玉瀬らの作成したこの尺度においても，「情緒的甘え」と「道具的甘え」とを区別しておらず，1つのものとして得点化している。以上2つの研究をまとめると，「甘え」を尺度化するこれまでの実証的研究の流れにおいて，「情緒的甘え」と「道具的甘え」とを区別する視点はこれまでに取り上げられておらず，両者が混同されたまま得点化されて扱われているといえる。

そこで，本研究の目的は，このような「甘え」研究の現状をふまえ，情緒的甘えと道具的甘えを弁別できる甘え欲求尺度を探索的に構成することである。その際，特に，異なった甘え対象への甘え欲求の強さが，これら2つの「甘え」によってどのように異なるかを検討する。

[5]「甘え行動」を「甘える行動」と「甘えさせる行動」との2つの相補的な観点から捉える考え方は，すでに加藤（1998b）によって提出されている。そして，それぞれの側面を測定する尺度は，加藤・小林（2000）と小林・加藤（2002）が尺度を構成している。玉瀬らは必ずしもこれらの研究には言及していないが，同様の視点から，「甘え」に「甘えたい」と「甘えられたい」の2側面を仮定し，「甘え」尺度を構成している。その際，「甘えられたい」側面については，「甘えたい」尺度項目の文章表現を能動態から受動態に変えることによって作成している。しかし，本研究では，「甘えたい」の側面に焦点をあてているため，玉瀬らの「甘え」下位尺度についてのみ取り扱う。

[6]玉瀬らは，この「甘え」下位尺度を「意識レベルの甘えを測定するもの」として行動化された甘えとは区別している。だが，「意識レベルの甘え」が示す具体的な内容については厳密に定義していない。

（4）「甘え」における個人差の検討：甘えタイプの視点から

これまでに藤原らの「甘え表出」尺度を用いて，甘え表出に関するものとして，性差（藤原・黒川，1981）や出生順位（大迫・高橋，1994）などの要因が検討されている。このような要因以外にも，実際に日常生活での色々な人の甘え行動を観察してみると，甘えるのが好きな人とそうでない人といったような多くの個人差があると認められる。それでは，「情緒的甘え」と「道具的甘え」とを区別したときに，「甘え」（特に甘え欲求）の個人差は，どのように異なって見られるのだろうか。

本研究では，加藤（1998b）の理論化した甘え行動のパターンにおける個人差を測定するために開発された「甘えタイプ」尺度（加藤・小林，2000）を用いる。Kato（1995/2005）は，その人の現在の甘え行動が，その人の過去の甘え経験の積み重ねの中で形成される「甘え交流の内的作業モデル（the internal working models of *amae* interactions），『甘え』IWM」に大きく規定されると想定している（詳細は小林・加藤，2001）。加藤（1998b）は，「甘え」IWMが他者とのインタラクションの中で形成される自己観や他者観を強く反映したものであると考えている。それゆえに，「甘え」IWMは，その2つの高低の組み合わせによって4つのタイプに分けることができると理論化した。この甘え行動タイプは，自己観・他者観両方がポジティブな「甘え上手タイプ（A型）」，自己観は高いが他者観が低い「甘え難いタイプ（B型）」，自己観が低く他者観は高い「甘えたくても甘えられないタイプ（C型）」，両方とも低い「混乱型甘え屋タイプ（D型）」に分類される（Table 1）。

この理論化にもとづき，加藤ら（2000）は「甘えタイプ」尺度を構成し，調査を行った。その結果，この4つの甘え行動タイプは，甘え行動パターンや甘え行動に伴う感情や思考において質的に異なっていることが分かっている。なお，これに加えて，この尺度の有効性は，そ

Table 2
甘え欲求尺度：3状況での「情緒的甘え欲求」項目と「道具的甘え欲求」項目

甘え目的	問題状況		
	家庭問題	進路問題	友人問題
情緒的甘え	1. グチを聞いてほしい 2. 気持ちの支えやよりどころになってほしい 3. つらい気持ちを分かってほしい 4. 慰められたい 5. 安心できるように，そばにいてもらいたい	1. 話を聞いてほしい 2. ありのままの自分を受け入れてほしい 3. 励ましてもらいたい 4. 悩んでいる気持ちを理解してもらい，慰められたい 5. 気分がまぎれるように，かまってほしい	1. 話を聞いてもらいたい 2. 自分の心のよりどころになってほしい 3. その状況を見守ってほしい 4. 慰められたい 5. 気持ちを理解してもらい，かまってほしい
道具的甘え	1. 解決策を考えてもらいたい 2. けんかした親との関係を取り持ってほしい 3. 気分転換に付き合ってもらいたい 4. その状況を変えてもらいたい 5. 相談にのってほしい	1. 解決策を考えてもらいたい 2. 自分の手本となるものを示してほしい 3. 気晴らしに付き合ってほしい 4. その状況や環境を変えてほしい 5. 手助けやアドバイスをしてほしい	1. 解決策を考えてもらいたい 2. 仲を取り持ってほしい 3. 気分転換に付き合ってほしい 4. その状況を変えてほしい 5. 手助けやアドバイスをしてほしい

注：各甘え対象に対して「どのくらい強くそのような甘え欲求を感じるか」について，7件尺度（1：全く感じない～7：非常に感じる）で評定を求めた。

の他の研究でも示されている。小林・加藤（2006）は，過去の親子関係の質と現在の「甘えタイプ」に関連があることを示している。また，Kobayashi & Kato（2004）は，「甘えタイプ」と様々な甘え対象への甘え欲求・甘え抵抗感との関連を検討した。そこでは，「甘えネットワーク[7]」の座標上に5つの異なった甘え対象をプロットさせた。そして，プロットされた人数を分析した結果，甘えタイプがA型＞C型＞B型＞D型の順で甘えられる対象をより多く持っていることが明らかになった。特に，注目された結果は，甘えることが嫌いなB型が，親友や恋人に対してすら，あまり甘えたいと思っていないことであった。

[7]「甘えネットワーク」とは，甘え欲求と甘え抵抗感の二次元による座標上に，甘え対象をプロットすることによって取り出される。

[8]日常生活の中では，甘える側と甘えさせる側で甘え目的の捉え方が一致しないこともあると考えられる（例：甘える側は情緒的に甘えているつもりでも，甘えさせる側はそれを道具的な甘えであると見なしている）。しかし，今回の調査では，実際に甘え行動を起こす前に甘える側の内部に生じる甘え欲求の強さについて検討することが目的となる。したがって，この質問紙では，甘えさせる側がその「甘え」をどう捉えるかは問題とせず，甘える側から見た場合についてのみ回答を求めるものである。

以上のように，「甘えタイプ」尺度は，「甘え」における個人差を捉える上で有効な指標の1つであるといえるだろう。だが，これまでの甘え行動タイプを分析したわれわれの研究においても，「情緒的甘え」と「道具的甘え」とを区別してきていない。もしこの2つの「甘え」目的を区別するという視点を導入して甘えタイプの違いを分析するならば，これまでに得られた結果とは違ったパターンが示されるかもしれない。本研究では，「甘えタイプ」の視点からも，探索的に「情緒的甘え」と「道具的甘え」との違いを検討する。

方　法

回答者

大学生301名（男性116，女性182；18～32歳，M＝20.7）。

調査時期と調査方法

2004年11月～12月に実施した。講義時間内に質問紙を配布し，1週間後に一斉に回収した。

質問紙

1．甘え対象への甘え欲求に関する質問項目[8]

甘え対象：本研究では，甘え対象として，父親・母親・

恋人・親友・友人を選択した。なお，藤原らの尺度では12対象を用いており，本研究でも当初は全ての対象についての検討を計画した。だが，回答のしやすさや調査人数の限界，兄弟姉妹を持たない学生が近年では増えていることなどを考慮して7対象は除いた。

甘え状況：藤原らは，「甘え」が比較的表出されやすいと考えられる状況として「危機的で困惑した状況」を設定した。本研究でも同様に，「日常生活上，何らかの問題があり，本人がそれについて悩んでいたり困っていたりする状況」において，人は誰かに甘えたい気持ちを持ちやすいだろうと想定した。以下ではこれらを「甘え状況」と呼ぶ。状況を設定する上で，まず，藤原らや玉瀬らによる甘え状況について検討を行い，内容が似ているものをまとめることで7つのカテゴリーに分類した。その中から，特に大学生が一般的に体験することが多いと想定される状況として，家族問題，進路問題，友人問題の3つのカテゴリーを選択した。教示では，家族問題は「親と自分との関係がうまくいかないとき」として，進路問題は「自分の進路について悩みがあるとき」として，友人問題は「友人とけんかして険悪な関係になり，悩んでいるとき」として提示した。

甘え欲求尺度の作成：「情緒的甘え」と「道具的甘え」との甘え目的各々について概念的定義にもとづき，各甘え状況ごとに甘え欲求を表す項目を新たに作成した。その際，項目の語尾を「～してほしい」または「～したい」に統一することで，明らかに甘え欲求をとっていることが分かるようにした（なお，藤原らや玉瀬らの項目を修正することなく使ったものは，「慰められたい」の1項目のみである）。以下ではそれぞれの項目を，情緒的甘え欲求項目と道具的甘え欲求項目とする。最終的に，1つの状況につき情緒的甘え欲求項目が5つ，道具的甘え欲求項目が5つの計10項目からなる「甘え欲求尺度」を作成した（具体的な項目内容はTable 2を参照）。

以上によって，回答者は5対象×3状況×10項目の計150項目に回答することになる。各甘え状況で各甘え対象に「どのくらい強くそのような甘え欲求を感じるか」について，7件尺度（1：全く感じない～7：非常に感じる）で評定を求めた。

2．甘えタイプ尺度（加藤・小林，2000）

この尺度は，まず，4つの甘え行動タイプが各々特徴的に持つと想定される甘え行動や甘え感情，甘え態度についての記述文を読み，自分自身が他の人に甘えるときのことにどれぐらいよくあてはまると思うかについて，7件法（1：全くあてはまらない～7：非常によくあてはまる）により自己評定を求める。次に，最終的に最もよく自分自身にあてはまるタイプを1つだけ選択するように求める。ここで選ばれたタイプがその人の「甘えタイプ」であると操作的に定義している。この甘えタイプ尺度を用いたこれまでのわれわれの研究では，一般的な他者を甘え対象として「甘えタイプ」を検討してきた（加藤・小林，2000；小林・加藤，2001）。しかし，本研究の目的では，特定の甘え対象への甘え欲求を検討することであることから，「甘えタイプ」においても一般的な他者に対するタイプではなく，特定の甘え対象に対する「甘えタイプ」を測定した。具体的には，教示文中で「他者」を表す言葉を「父親・母親・恋人・親友・友人」にそれぞれ置き換えた5種類の甘えタイプ尺度を用意し，対象別の甘え行動タイプを測定した。したがって，「父親に対するタイプはB型だが，恋人に対するタイプはA型である」というように，対象によって「甘えタイプ」が異なる人が存在した。

結　果

（1）甘えタイプ尺度の評定結果

回答者が各甘え対象に対して「最もあてはまる」と感じた「甘えタイプ」に入った人の人数はTable 3に示したとおりであった。なお，一般的他者を甘え対象として検討してきたこれまでの研究結果（加藤・小林，2000；

Table 3
各甘え対象に対して「もっともあてはまる」と報告した人数（%）

		甘えタイプ				
		A型	B型	C型	D型	合計人数
甘え対象	父親	74（24.6%）	148（49.2%）	30（10.0%）	32（10.6%）	284
	母親	154（51.2%）	84（27.9%）	27（ 9.0%）	20（ 6.6%）	285
	親友	128（42.5%）	67（22.3%）	69（22.9%）	22（ 7.3%）	286
	友人	75（24.9%）	102（33.9%）	80（26.6%）	34（11.3%）	291
	恋人	127（42.2%）	25（ 8.3%）	64（21.3%）	18（ 6.0%）	234

注：甘え対象ごとに「甘えタイプ尺度」に回答するため，対象により甘えタイプが異なる人もいる。

小林・加藤，2001）により，回答者全体の中で各甘えタイプが占める割合は，C型＞A型＞B型≒D型となる傾向があることが分かっている。すなわち，甘え対象が一般的他者の場合，C型が最も高い割合（45％前後）を占め，ついでA型が同じくらいに高い割合（35％前後）を示すことが多い。それに対しB型とC型にあてはまる人はかなり少ない（10～20％）。

本研究では，大きく次の2つの特徴が指摘できよう。①甘え対象が親友・恋人である場合，A型がC型より多くなる。だが，その他では，甘え対象が一般的他者の場合とかなり類似した割合パターンが示されていた。それに対し，②甘え対象を父親と母親した時の結果は，甘え対象が一般的他者の時の割合パターンとは大きく異なっていた。A.甘え対象が父親である時には，一般的他者ではかなり少ないはずのB型の人数が逆に最も多くなり，ほぼ半数を占めていた。つまり，大学生では「父親に甘えることは嫌いだ」と思っている人がかなり多いことが分かる。B.甘え対象が母親である場合は，A型が50％以上を占めており，ついでB型＞C型＞D型の順になっていた。したがって，父親の場合とは対照的に，母親に対しては「甘え上手」なタイプになる人が半数に上っていた。

これらの結果は，甘え関係の質が甘え対象により大きく異なることを示唆するものである。なお，甘え対象による甘えタイプの割合のパターンの違いについて，本研究ではこれ以上言及しない（さらに人数を増やしたデータによる分析結果は，小林・加藤（2005）に報告している）。

（2）甘え目的による甘え対象への甘え欲求差の検討

情緒的甘え欲求項目と道具的甘え欲求項目について，3状況を合成することで，情緒的甘え欲求得点と道具的甘え欲求得点を作成した。次に，2（甘え目的：情緒的甘え・道具的甘え）×5（甘え対象：父親・母親・親友・友人・恋人）の2要因分散分析を行った(Fig. 1)。なお，これら2要因はいずれも被験者内要因であった。以下の下位検定では，全てTukey法を用いた。分散分析を行った結果，甘え目的と甘え対象の2つの主効果及び交互作用が有意になった（甘え目的：$F_{(1,241)}=235.6$, $p<.01$；甘え対象：$F_{(4,238)}=156.7$, $p<.01$；甘え目的×甘え対象：$F_{(4,238)}=72.2$, $p<.01$）。有意な甘え目的の主効果から，大学生は，情緒的な甘え欲求を道具的な甘え欲求よりもより強く持っているといえよう。なお，7件法による評定であるため，平均得点が4以上になった場合，甘え欲求が明らかに存在しているといえる。この観点にもとづくならば，親友・恋人においては，情緒的甘えのみがより顕著に見られるといえよう。したがって，大学生は，積極的には甘えたいと思っていないようだが，親友や恋人には情緒的には比較的甘えたいと思っているようである。つまり，大学生は何か悩むことがあったときに，問題解決のために他者に具体的にどうにかしてほしいと思うよりも，根本的な解決にはならなくても，構ってもらったり話を聞いてもらったりすることをより求めると考えられる。このように問題解決のために具体的に何かをしてもらうのではなく，情緒的なやりとりによる心の満足をより強く求めるということの中に，まさに「甘え」の本質が情緒的なやりとりにあるということを反映していると言えるのではないだろうか。

次に，有意な交互作用について下位検定を行った結果からは，「情緒的甘え」では，恋人≒親友＞友人＞母親＞父親の順に甘え欲求を強く感じていた（親友と恋人以外の間では $p=.09$，それ以外では全て $p<.01$）。「道具的甘え」では，全ての対象間で有意差が見られ，親友＞恋人＞友人＞母親＞父親の順となっていた（全ての対象間で $p<.01$）。つまり，親友は両方の種類の「甘え」で最も対象として選ばれやすいが，情緒的な甘えのやりとりを求める場合には，恋人も重要な甘え対象となっているといえる。Kato(2005, p.68）は，学生と成人とを対

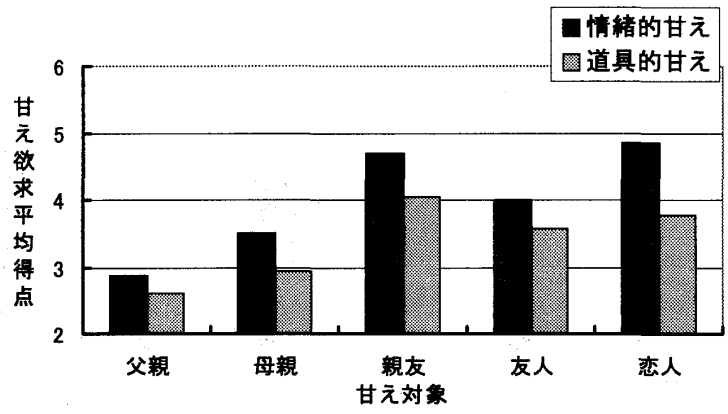

Fig.1　各甘え対象への甘え欲求の強さ

象に行った調査から，学生では親や親友が甘え対象として多く選択されているのに対して，成人では恋人・配偶者が最も選ばれやすいことを示している。本研究結果はKatoの結果を支持するものである。すなわち，「道具的甘え」では最も強く甘え欲求を持つ対象は依然として親友であるが，「情緒的甘え」では恋人が親友と並んで甘え欲求を最も強く持つ対象となっており，平均得点ではむしろ恋人の方が高くなっているのが分かる。以上のように，本結果とKatoの結果から，青年期（特に，大学生）の時期は重要な甘え関係が親友関係から恋人関係へ移行する時期であり，それが情緒的甘えにおいて先行して起こる可能性があることを示唆するものといえよう。

また，本研究は，藤原らによる「親よりも親友や恋人に対して甘え欲求を強く持つ」という結果をも追試していた。したがって，大学生くらいの青年期になると，家族以外の人に甘え欲求を向けることがより多くなるといえよう。特に，父親への甘え欲求は，どの対象と比較しても一貫して低かった。しかし一方で，母親への情緒的甘え欲求（M=3.50）は，友人への道具的甘え欲求（M=3.58）とほぼ同じ程度である。このことから，次のようにいえるだろう。すなわち，一般に親からの精神的な独立が求められる時期であり物理的にも家族から離れて生活する者も多くなる18歳以降の青年期にある者の甘え関係は，家族から家族以外の他者，特に恋人へと移り始める時期と考えられる。だが同時に，甘えの原型である母親に対しても，情緒的なやりとりを甘えることで行いたいという気持ちが比較的表れやすいものであるといえるだろう。これは，藤原らが「情緒的甘え」と「道具的甘え」を区別していなかったために見えていなかったことであり，「甘え」をその目的により区別することで初めて捉えることができたものだといえよう。

（3）甘えタイプによる個人差の分析

甘えタイプによる個人差がどのように示されていたのかを検討するため，各甘え対象ごとに，2（甘え目的：

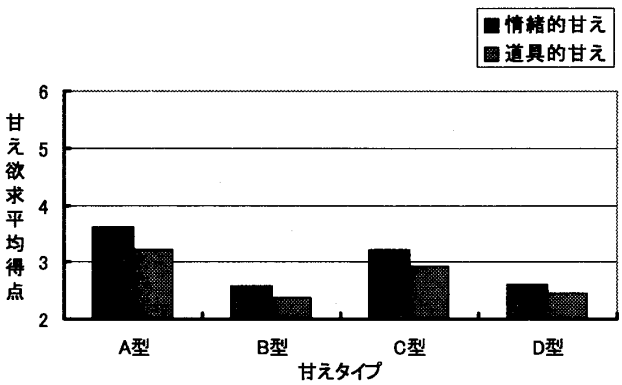

Fig.2　父親への甘え欲求の強さ

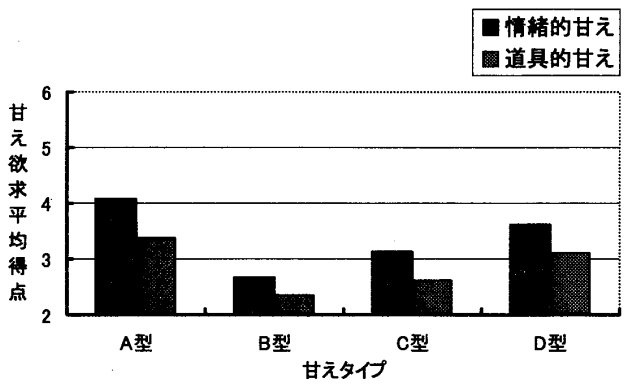

Fig.3　母親への甘え欲求の強さ

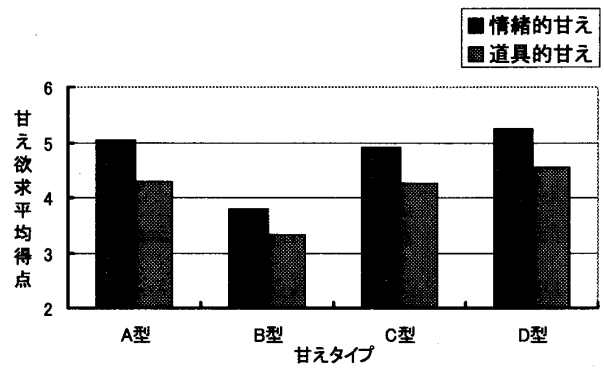

Fig.4　親友への甘え欲求の強さ

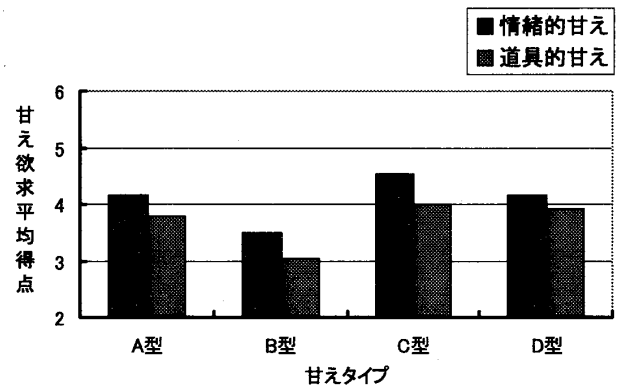

Fig.5　友人への甘え欲求の強さ

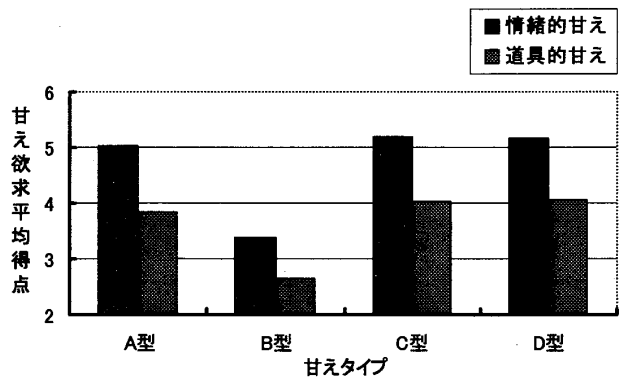

Fig.6　恋人への甘え欲求の強さ

情緒的甘え・道具的甘え）×4（甘えタイプ：A型～D型）の2要因分散分析を行った。その結果，母親で甘え目的と甘えタイプの2つの主効果及び交互作用が有意となった（$F_{(1.281)}=110.3$, $p<.01$；$F_{(3.281)}=18.4$, $p<.01$；$F_{(3.281)}=7.30$, $p<.01$）。母親以外の4対象では，甘え目的と甘えタイプの主効果のみが有意であり，交互作用は見られなかった（以下，統計値を示す。甘え目的の主効果と甘えタイプの主効果および交互作用の順で，父親（$F_{(1.280)}=40.8$, $p<.01$；$F_{(3.280)}=12.8$, $p<.01$；$F_{(3.280)}=2.21$, $p=.09$），親友（$F_{(1.281)}=108.6$, $p<.01$；$F_{(3.281)}=15.9$, $p<.01$；$F_{(3.281)}=1.64$, $p=.18$），友人（$F_{(1.287)}=13.7$, $p<.01$；$F_{(3.287)}=15.9$, $p<.01$；$F_{(3.287)}=1.23$, $p=.30$），恋人（$F_{(1.229)}=175.5$, $p<.01$；$F_{(3.229)}=12.2$, $p<.01$；$F_{(3.229)}=1.67$, $p=.18$））。

以上の結果を図にしたものがFig.2～Fig.6である。図から分かるように，どの甘え対象のどの甘えタイプでも，情緒的甘え欲求＞道具的甘え欲求となっている。

次に，甘えタイプの主効果からその特徴をまとめると，以下のことが示唆される。

A型：どの対象に対しても，一貫して甘え欲求を最も強く持つ。

B型：どの対象に対しても，一貫して甘え欲求を持たない。

C型：A型と似たパターンを示す。ただし，母親への甘え欲求においてA型＞C型となる点で，A型とは異なる。

D型：A型とC型の中間に位置するパターンが多い。父親への甘え欲求において，A型＞D型である点が特徴的である。

なお，以上の各タイプの特徴は，Kobayashi & Kato (2004) の「甘えネットワーク」の研究において得られた知見とも一致するものであった。さらに，母親を甘え対象とした場合の交互作用について下位検定を行った結果，情緒的甘え欲求において注目すべきタイプ間の有意差が見られた。この差は道具的甘え欲求では見られなかったものである（具体的には，道具的甘えではB型≒D型であるが，情緒的甘えではB型＜D型であり（$p<.05$），両者の違いがより顕著となる）。また，交互作用の傾向が示された父親においても，下位検定の結果から，情緒的甘え欲求において注目すべきタイプ間の有意差が見られた。母親の場合と同様に，この差は道具的甘え欲求では見られなかったものである（具体的には，道具的甘えではB型≒C型であるが，情緒的甘えではB型＜C型であった（$p<.05$））。つまり，「他者に甘えたいと思わない，他者を信用できないから甘えたくない」というB型の特徴は，両親への情緒的甘えにおいてより顕著に示されるといえよう。小林・加藤（2006）は，親による過去の虐待的行為の有無と現在の甘えタイプとの関連について検討を行い，B型で親によるニグレクト（育児放棄）の経験を受けていた者が多く見られることを示した。すなわち，B型の者は幼児期に親との情緒的なやりとりを十分に経験しておらず，むしろ親から拒絶的に扱われることが多かった可能性があるのではないだろうか。「B型は，親に対して，道具的な甘え欲求はC型やD型と同程度に持つ。だがその一方で，情緒的な甘え欲求ではどのタイプよりも顕著に低い」という本研究の結果は，B型の過去の親子関係における情緒的やりとりの少なさを反映している可能性があると解釈できよう。

以上のことにより，甘えることで構って欲しい・受け入れてもらいたいと思うかどうかという情緒的甘えの場合は，ただ何かをして欲しかったり与えてもらいたかったりする道具的甘えの場合よりも，それまでのその人との甘え関係の中で形成されてきた基本的な甘えのパターン（甘えIWM）によって規定されていると考えられるのではないか。さらにいうならば，その人が現在持つ甘えIWMは，情緒的な甘えの側面とより強く関係しているといえるのではないだろうか。であるとするならば，今後，例えば甘えIWMの形成の過程やその結果として現れる「甘え」における個人差を捉える上で，「情緒的甘え」と「道具的甘え」とを区別し分析していくという視点を持つことは重要な意味を持つものとなるだろう。

考　察

（1）情緒的・道具的の視点の重要性

本研究は，加藤（1998）によって提出された甘えの目的による2種類の甘えの理論的分類の意義を実証的に検証するものである。「情緒的甘え」と「道具的甘え」を区別したことにより，これまでの甘え研究の中では捉えられなかったことが少なくとも次の3つ明らかになった。

第1に，18歳以降の青年期の人（大学生）は，困ったり悩んだりした状況において，人をあてにして何かをやってもらいたい（道具的に甘えたい）気持ちよりも，情緒的に構ってもらったり話を聞いてもらったりしたい（情緒的に甘えたい）気持ちを相対的により高く持っている。これは，甘え欲求の生起には「何のために甘えたいのか」という「甘えの目的」が密接に関係していることを示唆している。これまでの研究のように甘えの目的による区別をせずに甘え欲求を分析してしまった場合に，「大学生は他者に甘えたいとは思っていない」というようにこの年齢層の甘え欲求を過小評価してしまう可能性がある。

第2に，友人に対して道具的に甘えたいと思うのと同じくらい，母親は情緒的に甘えたいという気持ちを持っていることが示された。これまでの藤原ら（1981）によ

る「大学生では，親よりも親友や恋人の方が甘え対象になりやすい」という知見が，「情緒的甘え」と「道具的甘え」とを区別することで，必ずしもそうとも言い切れないことが分かる。すなわち，母親は青年期に入ったからといって完全に甘え対象から除外されるわけではなく，情緒的に甘えたいときには甘え対象として選ばれている可能性がある。

第3に，甘え欲求における個人差の要因は，情緒的な甘えにおいてより強く表れる可能性が高いことが示唆された。このことは，ある人が現在持っている甘え行動のパターンが情緒的な甘えにおいてより強く反映されやすい可能性を示している。これまでの甘え研究において，甘え行動や甘え欲求にどのような個人差が見られるかを検討した実証的研究は，まだ数少ない。情緒的甘えと道具的甘えとで個人差の出方が異なる可能性があることは，「甘え」における個人差研究が今後発展していく中で，重要な視点を提供するものであるといえるだろう。

以上のように，「情緒的甘え」と「道具的甘え」の区別は，「甘え」を捉える上で必要不可欠なものであり，甘え研究が進められる中で常に意識されなくてはならない視点だといえよう。今後，この2つの甘えが本質的にどのような違いを持つものであるかについて，さらなる検討が必要である。Kato(1995/2005) は，甘える前・甘えている間・甘えた後の各段階に体験されている思考や感情を「甘え交流プロセス・モデル」として図式化している。本研究は，この甘え交流プロセル・モデルの中の甘える前段階で生じる甘え欲求についてのみ検討したものだと位置づけることができる。

今後，このプロセス・モデルのその他の段階についても，「情緒的甘え」と「道具的甘え」の視点から捉えなおすことが必要である。例えば，「甘え」が拒絶されたときの反応として，このモデルでは，他罰的反応（うらむ，ひがむ），両価的反応（すねる，ふてくされる，など），自罰的反応（すまないと思う）などが生じるとしているが，「情緒的甘え」と「道具的甘え」によって，拒絶された後の感情反応の程度や種類が異なっている可能性がある。「情緒的甘え」は，相手の自分への愛情を試す動機があり，自分の気持ちを受け入れてくれることを期待して行われると考えられる。であるとすると，甘えが拒絶された場合には，「道具的甘え」よりも他罰的反応や両価的反応が生じやすいのではないだろうか。以上のように，「情緒的甘え」と「道具的甘え」を一連の「甘え」のやりとりの中で捉えなおすことが，今後，「甘え」現象をより深く理解する上で大切な視点となると考えられる。

（2）本研究の限界と今後の課題

本研究の限界と今後の課題として，以下の3点を指摘したい。第1に，尺度の問題である。本研究は，情緒的甘え・道具的甘えによる甘えの区別を初めて実証的に検討することを目的として行われたものであり，「甘え欲求」尺度の厳密な尺度構成を目的としたものではなかった。そのため，甘え欲求尺度には，尺度として次のような限界がある。3状況で項目が等質になるように作成することができなかった。その原因として，状況によって同じ項目がそのままの表現で使えるとは限らないため，修正する必要があったからだ（例えば，道具的甘え欲求項目の中に，「その問題状況の原因に相手が直接働きかけてくれること」を求める項目があった。これを，①家族問題状況に翻訳すると「喧嘩した親との関係を取り持ってもらいたい」，②友人問題状況では「仲を取り持ってほしい」という項目となったが，③進路問題状況では具体的な人物が存在しないために「自分の手本となるものを示してほしい」という項目にならざるを得なかった）。したがって，分析では，最終的に3状況での得点を合成しているが，項目表現の違いによって状況ごとに意味が異なっていた可能性がある。そのため，今後は情緒的甘え欲求と道具的甘え欲求をより厳密に得点化して捉えるためには，項目表現を統一することで項目の内容を等質化していく必要があるだろう。であるとするならば，3状況で共通して使用できる項目を考案する必要があるだろう。また，新たに構成した尺度により，本研究の結果を追試し，再現性を確認する必要性もあるだろう。

第2に，甘え状況の設定の問題である。設定した甘え状況が，道具的甘え欲求を生起しやすいものに偏っていた可能性が挙げられる。本研究では，甘えたい気持ちが生起しやすい状況として，藤原らと同様に「ある問題のために困ったり悩んだりしている状況」を甘え状況として選択した。確かに，これらの状況では，「問題解決のために他者に何かしてもらいたい，頼りたい」という道具的な甘え欲求を生起しやすくしているだろうと考えられる。だが，情緒的な甘え欲求を生起させるために，今回用いた甘え状況は十分なものであったのだろうか。日常での「甘え」を観察してみると，他者に構ってもらいたい，一緒にやりとりを楽しみたいといった情緒的な甘え欲求は，困難に直面して心理的に余裕のない状況であるよりも，むしろやりとりを楽しむ気持ちのゆとりがある場合の方が生じやすいのではないだろうか。であるならば，今回の甘え状況では，情緒的甘え欲求を十分に喚起できなかった可能性がある。したがって，今後は，どのような状況において2つの甘え欲求が生起しやすいのかをさらに検討した上で甘え状況を設定しなおし，追試を行う必要があるだろう。

第3に，理論的な問題である。本研究では「情緒的甘えが最も原型的な甘えであり，道具的甘えはそれを基礎として派生的に生じるものである」というように理論的

に想定した。しかし，この想定が本当に妥当なものであるのか，「情緒的甘え」と「道具的甘え」の関連について，実証的なデータによる検討が必要である。例えば，幼児はいつごろから意識的に道具的甘えができるようになるのだろうか。幼児期に十分な情緒的甘えを経験していない場合，道具的な甘えを身につけることは難しいのだろうか。情緒的甘えが苦手だったり嫌いだったりする人は，道具的甘えでも同様になるのだろうか。このような研究により，情緒的甘えと道具的甘えの関係性をより明確にしていくことができるだろう。今後，特に「甘え」の発達的変化という視点から，更なる分析が重要となるだろう。

(3) まとめ

本研究は，甘えの目的により区別される「情緒的甘え」と「道具的甘え」の視点の有効性について，初めて実証的なデータにもとづく検討を行ったものである。大学生を対象として，新たに「甘え欲求」尺度を作成した上で，ある甘え状況において情緒的甘え欲求と道具的甘え欲求を５つの甘え対象にどのくらい感じるかについて検討した。また，「甘えタイプ」尺度（加藤・小林，2000）を用いることで，２つの甘え欲求における個人差についても検討を行った。

分析の結果，「情緒的甘え」と「道具的甘え」を区別することにより，これまでの研究結果（藤原ら，1981）とは異なり，大学生は母親に対して情緒的な甘え欲求を相対的により高く持つことが示された。甘え目的の視点を持つことは，これまでの「甘え」研究で見過ごされていた現象を明らかにする可能性に繋がるといえよう。また，「甘えタイプ」による個人差の分析からは，父親・母親への情緒的甘え欲求において，Ｂ型の「甘えたくない」という特徴がより強く見られることが示された。したがって，「甘え」における個人差を捉える上で，甘え目的による甘えの種類の区別は重要な示唆を与えるものといえる。

引用文献

土居健郎．(1971)．甘えの構造．弘文堂．

土居健郎．(1988)．「甘え」理論再考―竹友安彦氏の批判に答える―思想，**771**, 99-118.

Erikson, E. H. (1959). *Identity and the lifecycle*. Psychological issues, No.1. New York : International Universities Press.

藤原武弘・黒川正流．(1981)．対人関係における甘えについての実証的研究．実験社会心理学研究，**21**，(1)，53-62.

濱口恵俊．(1988)．「日本らしさ」の再発見．講談社学術文庫．

Kato, K. (1994/5). An analysis of amae processes and interactions: A review and a proposal of process models. *Journal of Cognitive processes and Experiencing*, **4**, 1-26.

Kato, K. (1995). *Empirical studies of amae interactions in Japanese and American adults: Constructing relational models and testing the hypothesis of universality*. Unpublished dissertation, University of Michigan (UMI Microform 9542870, Ann Arbor, MI: UMI Company).

加藤和生．(1998a)．*目的的甘えと道具的（あるいは依存的）甘えの区別*．九州大学大学院心理学講座．未発表論文．

加藤和生 (1998b)．*甘えタイプ・甘えさせタイプのモデル：個人差の理論化の試み*．九州大学大学院心理学講座．未発表論文．

加藤和生・小林美緒．(2000)．*甘えタイプ尺度：構成と妥当性の検討．科研研究成果報告書（平成11年度～平成12年度科学研究費補助金，基盤研究（C-2），課題名：「甘えの心理」測定尺度開発および甘え行動・交流状況の認知過程の分析)*，Pp.15-18.

Kato, K. (2005). Functions and structure of *amae*: *personality-social, cognitive, and cultural psychological approaches*. Fukuoka : Kyushu University Press.

木村敏．(1972)．人と人との間 ― 精神病理学的日本論―．弘文堂．

小林美緒・加藤和生．(2001)．子どもの頃の被虐待的体験やDV目撃は青年期の甘えにどのように関連しているのか．*認知体験過程研究*，9, 79-89.

小林美緒・加藤和生．(2002)．「甘えさせ行動タイプ」についての実証的研究．日本教育心理学会第44回総会（熊本）．大会発表論文集，410.

Kobayashi, M. & Kato, K. (2004). *Individual differences in* "amae *network* (*Japanese interdependence*)". Poster presented at the 28th International Congress of Psychology, August 8-13, Beijing, China.

小林美緒・加藤和生．(2005a)．各甘え対象への甘え欲求における甘えタイプ差の検討：～情緒的甘え・道具的甘えの視点から～．日本心理学会第69会大会（東京）．大会発表論文集，188.

小林美緒・加藤和生．(2005b)．*甘え対象により「甘えタイプ」の人数の割合はどのように異なるのか．九州大学大学院人間環境学研究院心理学教室．未発表論文．*

小林美緒・加藤和生．(2006)．青年期の「甘えタイプ」と子どもの頃の被虐待的体験との関係の検討．九州大学大学院心理学講座．未発表論文．

Kumagai, H. A. & Kumagi, A. K. (1986). The hidden

'I' in *Amae*: 'passive love' and Japanese social perception. *Ethos*, **14**(3), 305-320.

大迫弘江・高橋超. (1994). 対人的葛藤事態における対人感情及び葛藤処理方略に及ぼす甘えの影響. *実験社会心理学研究*, **34**, 44-57.

竹友安彦. (1988). メタ言語としての「甘え」. 思想, 758, 122-155.

竹友安彦. (1999).「甘え」をめぐる一つの対決と, そのメタ言語的考察—土居健郎氏に答える—. 思想, **779**, 27-32.

玉瀬耕治・脇本真希子. (2003). 大学生用「甘え」尺度の作成に関する研究. 奈良教育大学紀要, **52**(1), 209-219.